

2023年前期振り返り

長野大学前川ゼミ4年

工藤美有紀

前川ゼミでの2023年前期

- 塩尻小学校 校長先生と面談
- 埴生小学校 6学年担任の先生と面談
- 教育実習
- SNSによる「教員の実態について」

面談を通して

- それぞれの学校、学年、クラス単位でのオリジナルな学びがある。
- 「地域学習」に関して言えば、ICT機器を活用した学びが多い。
- 学校外や、不特定多数への情報開示は学校では難しい。
- 「やりたい」「気になる」先生がいることを伝えることが一番のサポート。
- ICT機器を活用していききたい先生＝普段のクラスでも使っている。

実践事例の中に「先生側の考えの変化」もプラスすることが安心感につながるかも！

教育実習を通して

- 実習校はICT機器は高校1年生の5月以降全員に配布されていた。
- 生徒が自発的に学ぶ学校だったが、教員がついていけない感じ。
- ICT機器の使用を認める＝携帯電話の使用を認める。
→校内での携帯電話の使用が禁止されている学校だったため、難しい問題だった。
- ICT機器関係は「情報の先生」にお任せする感じが否めなかった。

「情報の先生」であり、「ほかの先生」がOKだと言った。という安心感は大きい。

SNSの情報

- SNSで「ハッシュタグ 教育支援」などにも情報が多くある。
- SNSの方が多くの方に情報が伝えられる場所である。
→抜粋で情報が載る、投稿者の意見や考えで載る。ことが多い。
- 実際の教員の声も受け取ることができる場所でもある。
→学校単位でアカウントを持ち、簡易版学校HPみたいな位置づけもある。

他校や他者と繋がることを求めている先生や生徒は多い。

まとめ

- 「学校現場」に入りすぎてしまうと見えなくなってしまうことが多い。
→ 蓼科学のように多様な学生がサポートすることに面白さがあった。
- 教員が求めているのは、ノウハウだけでなく、「安心感」。
→ ほかの教員もやれました。乗り越えられました。は大きい。
- 誰でも自分の意見を出せる社会だからこそ、アンテナは高くしておく。
→ 自分と関わっていなくてもリアルな声は聞けると感じた。

すべてを踏まえて

長野大学 工藤美有紀

ICTデバイスを活用するメリット

- ・個別最適な学びが保証されること。

→正解がなく、多様な考え方ができる総合・探究学習でのICT活用が、教員にとっても生徒にとっても良いものになると感じた。

- ・リアルタイムな学びの可視化ができる。

→児童・生徒がデバイス上で作業をすることにより、瞬時にテキストマイニングなどを活用して学びを共有、可視化することができる。そのため、すべての子どもの気付きや考えを平等にひろえると感じた。

これからにむけて

- だんだん、「ICTへの不安感」が軽減されてきているように感じている。あくまでも、「ツール」にすぎないため、学びの幅が少し広がる意識でICTデバイスと向き合うことが大切になるのではないかと感じた。
- まだ高校では完全にICTが配布しきれていないため、小・中学校での厚いICT活用の学びが、高校での生徒たちの興味関心につながっていくのではないかと思う。高校ではBYODも容易にできることが分かったからこそ、小・中学校でのICT活用に重きを置いた方が良いと感じた。